英雄伝説－刹那の軌跡－

天魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄伝説－刹那の軌跡－

【Ｎコード】
Ｎ５１４７Ｙ

【作者名】
天魔

【あらすじ】
キーアは最悪の可能性を感じ取ってしまった
彼女は失われつつ有る、力の欠片を振り絞って願った
－助けて－と
幸か不幸か、それはある男に届いてしまった
この物語はその男に一通の手紙が届くことで始まる
現実はそこまで甘くはない
それを知りながらも壊そうと藻掻く彼らを面白いと思った
全ては終わりから始まっていた……

歌劇の始まり

初めまして、諸君。
いや、お久しぶりといったほうが良いかもしれないな。
私は怪盗B、世間ではそう呼ばれている者だ。
此度、ファルコムから碧の軌跡が発売されました。
もうすでにクリアした方も多いことだろう。
しかし、いくつかの都合が良すぎる点が気になりましてね。
それを少し変えた歌劇を皆様にお見せしたい。
では、その幾つかとはなんなのか？
それは三つございます。
まず一つ目、我らが同志、殲滅天使のことだ。
悲劇にも、この舞台では親代わりだったパテル＝マテルが壊れてしまった。
ヨシュア曰く、もう直せないとのこと……
彼女の過去から考えるに彼女はとても弱い。
戦闘能力ではなく、心が……だ。
彼女は今まで殻に篭っていたからこそ、耐えてこられたのだ。
それがエステル達によって破られてしまった。
確かに新たに心の拠り所が出来始めていた。
しかし、如何せんパテル＝マテルほどの奥底までに辿り着くには少しばかり時間が足りなかった。
そこに辿り着くまでにパテル＝マテルが壊れてしまった。
彼女は最大の心の拠り所がなくなったことで今まで耐えてきたモノを守るものがなくなってしまう。
それで起こったことは彼女の精神崩壊……
彼女は所謂廃人となってしまった。

次に二つ目、熊髭先生ことイアン先生だ。

最後の最後にロイドに説得されてキーアに話しかけたところでマリアベルに攻撃されてしまった。
ここで気になるところがある。
確かに彼女の攻撃は仮死状態にしただけかもしれない。
しかし、その後の手当が遅すぎる。
あれほど遅くなってしまっては血を失いすぎて、死んでしまう可能性のほうが高すぎる。
助かったとしても目が覚める可能性はかなり低く、仮に目覚めるとしてもかなり遅くなるだろう。
普通に考えて、帝国からのクロスベル解放にはまず間に合わないと見てもいいだろう。

最後に三つ目、アルカンシェルの最大の目玉、イリア・プラティエだ。
彼女はリハビリを経て、再び舞台の上に立つことが出来た。
いやはや、素晴らしいの一言だ。
事実は小説よりも奇なり……正にこれを体現する。
しかし、現実というものはそこまで甘くはない。
コレに付いては長くなるので本編で……

これから語る物語はこの三つの可能性を因果を弄ぶ力を失いかけたキーアが知覚してしまったことから始まる。
この三つを感じた彼女はそれではまたロイドたちがとても悲しみにくれてしまうということから、最後の欠片を振り絞って願ってしまう。
―助けてーと……
それを感じ取ったのはこれまた面白く、私の親友であった。
彼もまた、私とは近くて遠い美的センスを持っていて、互いに高め合う同志だ。
あのオリビエの様にライバルではなく、友でもない。

奇妙な関係だが、私は彼にとても惹かれている。
そして、彼が魔都クロスベルに行く理由は、私の一通の手紙が原因だ。

さてさて、長話はコレくらいとして、物語を始めようか。
それでは皆様、この物語が良きものであると願って……
縁がございましたら舞台の上でまた会いましょう。
それでは皆様、御鑑賞下さいませ……

歌劇の始まり（後書き）

設定の三つに関しては次回で詳しく書いていく予定です
一つ一話程度になる予定です
更新は二月に一度の予定？
調子に乗ればもっと早いかも

終わりから始まりへ ー前編ー（前書き）

レンに関してはファルコムの設定であるので楽でした
熊髭さんは描くこと少ないからイリアと混ぜる予定です
イリアはやたら長くなりそうなんだですけどね

終わりから始まりへ ー前編ー

全ては終わりから始まっていた。

「えッ……？」

「どうしたんだ、キーア？」

樹が崩壊する寸前、キーアは感じ取ってしまった。

このままでは訪れてしまう悲劇。

それを視てしまい、それはもう既に手遅れなのを理解してしまった。

一つ目はレンを襲う悲劇、二つ目は先程目の前で仮死状態にされてしまったイアン、三つ目はイリア……

「そんな……、なんで今更ッッッッ！？」

「キーアッ！？」

かつてロイド達が死ぬことを知った時と同じくらいの悲しみがキーアの心に溢れた。

それは先程まで明るく希望に満ちていたこの空間が一瞬でそれが塗りつぶしてしまった。

「そんなダメ！？

だ……れ……か……

誰……か……

誰か、助けてッッ！！」

力は既になくなりかけていることも承知でキーアは願ってしまった。

否、それを考えることすらなく、只々願ってしまった。

その反作用で何が起きるかも分からないままに。

そしてそれは幸か不幸か届いてしまった。
因果を弄ぶ力を持った幼き少女の願いは届いてしまったのだ。
これからどうなるかも解らない儘……

「…たくっ、ガキは脳天気な顔して笑ってりゃ良いんだよ。
好きなだけ泣け、笑え、怒れ、子供ってのはそういうもんだ。
小難しいことは大人に全部任せてたら良いんだよ……
だから……難しいことは俺に任せろ……な？
さぁ、最後は俺だけのソロステージだ」

一つ目の悲劇は、パテル＝マテルが壊れてしまったことだ。
ヨシュア曰く、もう直せないとのこと……
彼女の過去から考えるに彼女はとても弱い。
戦闘能力ではなく、心が……だ。
彼女は今まで殻に篭っていたからこそ、耐えてこられたのだ。
その殻は、レンがかつて『楽園』と呼ばれていた場所にいた時に作られたものだ。
『楽園』はペドフィリアに対する売春をする施設だった。
そこにはレンと数人の仲間たちがいた。

?リーダーの『クロス』
?好奇心旺盛の女の子・エッタ
?可憐で大人びた女の子・アジュ
?いつも殴られている男の子・カトル
?お姫様の『レン』
それ以外にもいたがレンは『どうでもいい』と思っていた。
しかし、お姫様である『レン』には仕事が来ませんでした。
他の子達が痩せ細ろえていく中、自分だけはおいしいものを食べ、お人形で遊んでいれば良かった。

何故、レンには仕事が来なかったのか……?

その理由を彼女は『特別だから』と言い、周囲の子供達も『レン』が喜んでくれればそれでいい、と口にしていた。
普通に考えれば一人だけ苦痛を味わないなんて理不尽が子供たちに我慢できるわけがない。
けれど、次第に他の子供達は段々と消えていきました。
ある日、『レン』は『クロス』に問いました。

「他の子達は何処に行ったの?」と……

それに対して『クロス』の返答はこうだった。

「ここは元々、僕とレンだけの世界だ」

さらに『クロス』は続けて言う。

「他のみんなはすぐに殺しちゃったくせに。
なんで僕だけ生かしておくんだ」

それは『クロス』が疲れていからだった。
他のみんながいなくなったから疲れているのだ。
クロスが疲れているから、他のみんなが消えた。

《身喰らう蛇》は崇高ではない無粋な組織を潰す事がある。
今回の対象は『楽園』だった。
その時やって来たレーヴェは『クロス』の体にある無数の十字傷を見て言った。
この無数の『クロス』は自分で傷つけたものだ。
自我を保つためにやったのだ、と。
つまり、クロスとは『レン』という人格を守るためにつけた傷の事。
他の仲間とは、レンが持つの人格の事なのです。
本当に別の子供がいたわけではなかったのです。
客から様々な注文を付けられ、多くの嗜好に合わせなければならなかった。
その中で、本当の『レン』を守るために、生まれた人格があの４人。

どの人格も彼女の一部である。
本当の『レン』という人格は、彼女が自我を保つために、クロスを始め、４人の子供達を生み出だし、演じました。
そうする事で自分を守るしかなかった。
『クロス』がリーダーだったのは、傷を刻む事がもっとも彼女を保つ術だった。
しかし、その最後の人格さえも壊れてしまう時が来た。
もう彼女を守る人格（盾）など存在していない。
そして本当の『レン』さえも傷付いてしまう前に身喰らう蛇が『楽園』を壊しに来た。
その後の『レン』は執行者となり、執行者としてとても優秀だった。
天才であった彼女は、また別の道を見つけたのに、それでも本当の自分ではなかった。

同じように自我を守る偽りの自分を作り出したのだ。
しかし、不幸なことに優れすぎていたからこそ、それは周囲に認められてしまった。
だから彼女の心は全く強くはない。
今までずっと目を逸らし、逃げ続けてきたのだから……
だが、その執行者の『レン』をエステルに壊されてしまった。
エステルならば本当のレンを救うことは出来るだろう。
ヨシュアを救ったように。
太陽のように照らすことで、きっと救えるはず――――だった。

しかし、すでに縁（よすが）となっていたパテル＝マテルが壊れてしまった。
まだ、心が強くなっていないレンにとってこの衝撃はとてつもなく大きすぎた。
本当のレンはそれに耐えられはしなかったのだ。
今しばらく、時間があれば何とかなったかもしれないが……
それに耐えられなかったレンはまともな受け答えどころか、食事すらまともに喉を通らなくなってしまった。
日に日に衰弱していくレン。
それを世話するエステル達もとても悲しんでいた。

キーアはこの光景を視てしまった……
ロイドたちを助けるために勝手に呼び寄せた……
自分の我侭で振り回してしまったから、彼女はパテル＝マテルは壊れてしまい、レンは廃人へとなってしまった……

キーアはその事実を視てしまった。
だからこそこの未来を認めたくなかった。

だから、願ってしまった

終わりから始まりへ ー後編ー

キーアが知覚した二つ目の悲劇はイアン先生だった。
彼は先程キーアの目の前でマリアベルに攻撃された。
確かに彼女は仮死状態にしただけだったかもしれない。
しかし、攻撃の衝撃でそれなりの速度で柱に叩き付けられ、内蔵も幾つか壊れてしまっているだろうということは容易に想像できるだろう。
果たして、それだけの重症を負いながら、明らかに遅い手当で命を取り留められるのか？
どう考えても答えはＮＯである。
仮に命だけは助かったとしても、目が覚める可能性は極めて低い。
しかし、この事件の後でクロスベルを襲う悲劇。
帝国の侵略に抵抗するにはイアンの力は必要不可欠だ。
ロイドたちの性格などから鑑みるに、帝国に抵抗するのは必至。
そこで彼の力が欠けた状態では唯でさえ、分が悪すぎる彼らが命を落とす可能性は高くなるだろう。
仮にそうなってしまってからでは遅すぎる。
その時にはもうキーアの因果を弄ぶ力はなくなっているのだ。

ーもうあの時の悲しみを味わいたくない

その一心でキーアは切に願った。
この要因が彼女に幸せを願う気持ちを強くさせた。

三つ目の悲劇はイリア・プラティエ。
アルカンシェルの花形スターである彼女。
太陽のような彼女は多くの人を魅了した。
舞台の上では勿論、プライベートの時でもその性格や行動で様々な人を惹きつけた。
しかし、彼女はイエーガーのクロスベル襲撃で重症を負ってしまう。
脚に関してはもう動くことすら怪しい。
それでも彼女は決して諦めなかった。
リハビリは大きな苦痛を耐え忍び、それでも懸命に真っ直ぐに突き進む彼女の姿は周りからは輝いて見えたことだろう。
そして、念願のリハビリの成果でウルスラ病院の医師によって脚が回復したことを告げられた。
それから彼女は今までの時間を取り戻すかのように舞台で練習を重ねた。
その姿を見ていたリーシャも安堵していた。
リーシャは自分がいたからシャーリィがアルカンシェルを襲撃したと思っていた。
だが、事実はそうではなく、彼女がいなかった所でイエーガーはアルカンシェルを襲撃しただろう。
そして、練習に練習を重ねたイリアは遂に公演の舞台に上がる。
しかし、ここで悲劇に襲われた。
イリアが舞台に上がることが確定したことにより、新聞社によって大々的に取り上げられることになった。
クロスベルの中でイリアを知らぬものは居らず、誰もが彼女に魅了されていた。
その彼女が襲撃によって重症を負い、リハビリを経て、再び舞台の上に上がる。

これほど人々を騒ぎ立てるモノはないだろう。
リハビリをしている間も何かと彼女の記事が多く書かれていた。
中には『イリア、再起不能か！？』等といったゴシップ記事が大いに出回った。
時の人である彼女の行動はクロスベル全体に大きく影響を及ぼしていた。

そして遂にその復活劇のクライマックスに悲劇は起きた。
復帰最初の公演のクライマックスだった。
彼女は突如、膝をついた。
その行動に誰もが呆気に取られ、目を疑った。
そしてそのまま、彼女は倒れ、会場は沈黙に支配された。
誰もが願わず、信じられないことが起こったのだ。
その日はそのまま幕が降り、イリアは再び病院に行く羽目になった。
そして精密検査の結果、イリア・プラティエは再起不能を申告された。
この日以来、彼女は自分の脚で立つことすら出来なくなってしまった。
それはクロスベルに大きな影響を与えた。
イリアはクロスベルにとって大きな希望だったのだ。
グノーシアの薬物事件、イエーガーの襲撃、クロイス家の野望、そしてディーター大統領による独立宣言。
これら全ての事件がクロスベルに大きな影響を与え、未だに修復すら儘ならない状況での、帝国の侵略。
その絶望の中でのイリアは正しく希望だったのだ。
その希望が瞬く間に絶望へと変わった。
太陽な彼女が一瞬で沈んでしまったのだ。
明けない夜が無いように、沈まない朝もないのだ。
そして、此度の朝は短すぎて、さらに深い夜を呼んでしまった。
一瞬の煌きはさらに深い闇を演出するだけに終ってしまったのだ。

一度でも……
たった一度でも公演が成功していたならば、それは希望になったかもしれないが、それは果たされぬままに、より印象的な絶望を植えつけただけだった。
イリアの脚が、まだ少しでも動くならば状況が変わったかもしれないが、微塵も動かすことが出来なかったのだ。
クロスベルは希望から一転、絶望の底へと落とされたのだ。

そして、この事件で一番影響を受けたのは他ならぬリーシャだった。
彼女はイリアに対して後ろめたく思っていた。
自分の存在が、『銀』という存在が災い呼んでしまったのだと思っていた。
そして、その数日後、リーシャはクロスベルから姿を消した。
彼女はやっと見出した光の道を自らの意志で閉じたのだ。
『銀』へと、復讐の道へと堕ちていったのだ。
それから『銀』の名は裏世界に轟き始めた。
より残忍、より残酷な殺し方を始めた『銀』
裏世界でその名を知らぬものとなり、大いに恐怖を与えた。

リーシャの失踪はすぐさまイリアに告げられて、それを聞いた彼女は一言だけ呟いた。

「今、あの娘は何処で何やってるのかしらね……」

その呟いた姿は普段からの彼女からは想像できず、何処か寂しげな姿だったという。

キーアは知覚してしまった。
この大いなる絶望を、誰もが包まれる絶望を。
故に彼女は願った。

この絶望を希望へと変える可能性を……

終わりから始まりへ ー後編ー（後書き）

これでようやく本編へと入れます
それにしても結構削っちゃいました
無駄に長く書いても変になってしまいましたので……
もうすこし表現がうまくなりたいです

機械仕掛けの銀細工（前書き）

時間的には零の軌跡の内容になります
これから一気に時間が飛ぶ可能性もあるのでご容赦を

機械仕掛けの銀細工

帝国との国境の境に設置されたベルガート門と呼ばれる関所。

「漸く着いたか」

そこを通り、クロスベルへと向かうと思われる男がいた。
帝国からクロスベルへ入ろうと、今まで乗ってきた物から降りて窓口へと歩いた。
通門審査票に書き込み、窓口嬢へと手渡す。

「お名前はアルクェイド・ヴァンガードさんですね？」

「あぁ」

「通門目的は帰宅……
場所は……ローゼンベルグ工房？」

「何か問題でもあるか？」

帰る場所に首を傾げられた事に、疑問を持ち訪ね返す。

「い、いえ……
あの、あなたが人形作りで有名な人なんですか？」

少し狼狽えながら、窓口嬢は目の前の男へ聞く。
クロスベルのローゼンベルグ工房と言えば誰もが知るほど有名だ。
アンティーク人形で有名な人物がそこにいるという噂だ。
そこで作られた人形はマニアが桁外れなミラを出して欲しがるとい

う。
そこに帰るとなると聞きたくなることだろう。
そうでなくとも彼女は警備隊の一員だ。
目の前にサングラスをして、黒い生地に深紅の歯車の刺繍がされたコートを着ている男がいたら不信に思い、話しかけるのは当然だろう。

「違う」

「そ、そうですか、しっ失礼しました」

冷たく否定された言葉に彼女は慌てて頭を下げる。

「もう通っても良いか？」

「はっはい、どうぞ！」

アルクェイドはそれを聞くとここまで乗ってきた物に戻っていった。
乗り物に近づいて行くと恐らくそれが有る場所を中心に人の円が出来ていた。

一また何時ものことか

それを煩わしく思いながらも戸惑いなく歩いていく。
そこに集まっている人を掻き分けながら歩む。

「人の物に纏わり付かないでくれないか？」

「これはあなたの物ですか？」

乗り物の場所まで行くと一人の警備服を着た少女が立っていた。

「そうだが、それが何か？」

「あなたのコレは何でしょうか？
一見、タイアが有ることから乗用車の一つだと思うのですがこういう形は見たことないです」

「魔導二輪車（オーバーサイクル）って言う、まぁ車の一種だな。
二輪車だから色々面倒だが、その分便利ではある」

「いえ、そういう意味ではなくて……」

「ああ、法律上の問題か？
一応一般乗用車として登録もしてあるし規律も守っている」

「そうですか、それは失礼しました」

それを警備隊の少女は敬礼して謝罪をする。

「気にしないでくれ、いつものことだ。
……あー、えーっと……」

「私はノエル・シーカーといいます。
階級は曹長です」

「と言う訳だ、曹長。
もう行ってもいいか？」

「はい、結構です」

アルクェイドはオーバーサイクルに跨ってエンジンをかけた。
一定のエンジンの駆動音と心地良い振動がアルクェイドの体に伝わっていく。

「あぁ、そうだ、余計な手間をかけた手間賃だ。
二つ渡すから、窓口の奴にも一つ渡しておいてくれ」

そう言ってアルクェイドは、腰に付けたバッグから無造作に丸い銀色の物を二つノエルに投げ渡した。
同じ物が幾つも入っているのか、手を入れた時にガチャガチャと音がした。
ノエルが慌てて受け取るのを見ると一気に加速して瞬く間に姿が小さくなっていった。

「彼は一体誰なんでしょうか？」

ノエルは突然の行動にも驚きながら、その後姿を見送った。
彼の姿が見えなくなるまで呆然としていた。
彼女は手元にある、先ほど投げ渡された物を見るとすぐさま驚愕した。

「えっ！？
コレって……」

銀のチェーンに結ばれたそれはある機械だった。
そこに刻まれた盾と翼を組み合わされた紋章の上にVの文字。
これは世界で有名な銀細工のエンブレムだった。
それは誰が造っているのか、どこに住んで居るのかさえ謎に包まれた作品だった。

ある時は裏社会のオークションで、ある時は田舎町の露天商の中に……
売られている場所すらも不特定で、出品者は知らない奴から買ったと言う。
オークションではその国の大物だったり、露天商では前から居た浮浪者や捨て子から買ったという。
作られた物は様々で、何かの像であったり、時計だったり、アクセサリーだったりする。
有名な芸術作品はある種の法則性が必ず存在する。
絵ならば書く対象、細工ならば造る種類といった風に。
それは各個人の誇りや求める物が起因するからだ。
こういう天才と呼ばれる狂人は、何かを極めることで産まれる。
その何かに重点、誇りとして揺るぎない物が存在するからだ。
故にそれを根底に置いた統一性があるはずなのだ。
しかし、これは何も統一性が無いのだ。
敢えて法則性を上げるならば素材が銀と言うことだけ。
何故制作者が個人だと分かった理由は全ての品に小さい深紅の歯車とその上にAと刻まれていたからだ。
そして、一番の謎はどうしてそれが有名になったのか……だ。
それはこのエンブレムを刻まれた最初の品が原因だった。

最初の品は5年前にある捨て子が質の悪い商品に売ったことが始まりだった。
その捨て子がある日、目覚めるとその紋章が刻まれたペンダントを握っていた。
それを見た捨て子は、ある優しい人が価値ある物をくれたのだと喜んだ。
その捨て子は大はしゃぎで近くで開いている露天商に売りにいった。

その露天商は物を見る目があったのか、捨て子の持っているペンダントがとても価値ある物だと思った。
しかし、意地悪な露天商は数十ミラで捨て子から買い取った。
思った程ではないと思った捨て子だったが、数十ミラも渡されると駆け足で去っていった。
それにほくそ笑んだ露天商はそれを数万ミラで売りに出した。
しかし、流石に高すぎたのか、その日はそれは売れなかった。
少ししょぼくれながらも帰った露天商だったが、次の日から現れなくなった。
数日後、不思議に思った捨て子は、人に聞いてみるとペンダントを売った次の日にバラバラ死体で見つかったという。
それに驚いた捨て子だったが、次の日目覚めると、手に死んだ露天商に売ったはずのペンダントがあった。
また誰かがくれたと思った捨て子は売ろうとしたが、あの露天商は既にいなくなっている。
仕方なく、捨て子はペンダントを首からかけながら街を歩いていた。
すると、捨て子は老婆から声をかけられた。

「坊や、良いペンダントをしておるね。
それを売っては貰えぬかの？」

声をかけてきた老婆は街で有名な人で、アクセサリーを集めるのが趣味で世界中から集めていると噂だった。
捨て子は喜んで売ると数万ミラも手渡された。
ペンダントがそれ以上の価値があると見た老婆は捨て子を遠い町の孤児院に連れて行った。
孤児院に連れて行かれた捨て子は今もその老婆と交流を保ちながら、孤児院で暮らしている。

それ以降、度々世界にそのエンブレムの品が至る所に出回り始めた。
その品々はわざと価格を低く買うと購買者が謎の死を迎えることが幾度も起きた。
その品々は曰わく品として世に出回った。
裏社会のオークションで売られている理由はそれだった。
芸術作品としても価値が高いとされるそれらは、買うものが後を絶たない。
そして今から3年前に表社会にも出回り始めた。
それはアクセサリーなどの小物を主に、ＩＢＣが売り始めたのだ。
それも子供のお小遣いで買える値段でだ。
これは裏社会に大きな影響を与えた。
普通の品が世界に出回ったことで曰わく品の価値が下がったのだ。
それを原因に世界中の有名人が制作者を捜したが何も情報が得れなかったのだった。

そして本の1ヶ月前にまた新たな品が出回った。
それは魔導動物（オーバーペット）と呼ばれる電子ペットだった。
銀時計サイズの細工で開くとモニターとスイッチが数個ある。
モニター内で好きな動物が飼えるという物だった。
これは特に女性に大いに売れた。
１０種類のタイプがあり、それぞれ飼えるものが違う。
一つのタイプに3種類のペットが飼える。
しかし、これは数がとても少なく、一番人気のタイプは数十万ミラで取り引きされている。
ノエルの受け取った銀細工はそれだった。

「銀の翼と盾、それに深紅の歯車……
それに、これはオーバーペットの一番人気タイプ！？
間違いなく本物のアルゲントゥム製品！

本当に何者……？」

軽く投げ渡されたそれを落とさないように気を付けながらもアルクェイドが消えた方角を眺めていた。

四肢の魔獣事件を調べている特務支援課。
その四人はマインツへと向かう途中にあるローゼンベルグ工房前へと着いていた。

「ローゼンブルグ工房……？」

「あぁ、此処が……」

がっちりと閉められた鉄の柵に提げられている看板の文字を読むとエリィが納得するように呟いた。

「あら、お兄さんたちだぁれ？」

彼らの後ろにスミレ色をした髪のゴシック調のドレスを来た少女が立っていた。

「君は？」

「あら、レディの名前を聞くときはまず自分から名乗るものよ？」

「ははっ、意外にませているじゃないか、お嬢ちゃん」

「こらランディ、俺はロイド」

「エリィよ、よろしくね」

ロイドの自己紹介を皮切りに次々と名を名乗る。

「レンよ、よろしくね」

レンはドレスの裾を軽く摘み上げてお辞儀をする。
ロイドたちはレンに最近起こっている魔獣事件について聞いてみたが此処に来たばかりで何も知らないとのこと。
工房の主も居ないことをレンは言うとロイド達は立ち去ることに決めた。

「それじゃ、何かあったらいつでも頼ってくれよ？」

「じゃあ、早速だけど、聞いてもいいかしら？」

ロイドの言葉にレンは訪ねてみた。

「空のように蒼い髪と海のように深い青の目をしたお兄さんを知らないかしら？」

「いや、知らないな……
皆は知っているか？」

「いや、俺も知らねえな」

「私もよ」

「……私もです」
「蒼い髪ってティオ助みたいな色なのか？」
「いえ、もうちょっと濃い色よ。
色々と目立つ人だから知っていると思ったのだけど……」
「君のお兄さんかい？」
「いいえ、でもそんな感じかしら」
兄と言われてくすくすと可笑しそうにレンは笑う。
「お兄さんたちが知らないならまだ帰って来てないのかも」
「一人で大丈夫なの？」
「大丈夫よ、レンはお姉さんだから一人でお留守番出来るわ。
それじゃあね、支援課のお兄さんたち」
そう言ってレンは鉄門を潜って行った。
レンが通ると門は独りでに閉まってしまった。
「なぁ、俺たちって支援課のこと言ってないよな」
「あっ」
「クロスベルタイムズを読んで知ってたんじゃないのか？」
「そうなのかもね」

「それにしても蒼い髪ですか……」

「お、ティオ助、気になってるのか？」

ランディが何処かニヤニヤとした顔でティオに尋ねる。

「いえ、自分と同じ髪色と言われて気になっただけです。
決して、ランディさんが想像したようなことではありません」

彼らは和気藹々と談笑しながら分かれ道へと降りていった。

西クロスベル街道から市内を通り、マインツ山道を通る。
その途中に現れる魔獣たちを旨く避けながら道を突き進むオーバーサイクル。

「この辺も大分整備されたな」

今ではバスも通る道は完璧に石畳へと整備されている。
土のように大きな振動にならずに細かい振動がアルクェイドの体に快い揺れを与える。
途中、クロスベル市内の整備のされ方はやや異常とアルクェイドは思った。
他の国を見てきたからこそ、何か違和感を感じていた。

「まぁ、俺には関係ないか。
そういや、今はクソジジイが居ないんだっけか……」
山の中腹に来た辺りでローゼンベルグ工房の方から四人組が歩いてくるのが見えた。
「ん？
うちの客にあんな奴らいたか？
アルカンシエルの新人か？」
ローゼンブルグはクロスベルの劇場の機械の作成から調整まで受け持っている。
それの関係あるとアルクェイドは思った。
「なぁ、君たち。
うちに何か用事か？」
アルクェイドは丁度全ての階段を降りてきたロイドたちに話しかけた。
「はい？」
「今ローゼンブルグから歩いてきただろう？」
「そうですけど……」
「おい、なんだこれは？」
「分かりません、乗用車のように走って来ましたけど……」

ランディとティオがアルクェイドのオーバーサイクルに興味を示した。

「空のように蒼い髪に海のように深い青の目……
レンちゃんの言っていた人かしら？」

「レンを知っているのか？」

「ええ、先程工房前で会いました」

それを聞くとアルクェイドはオーバーサイクルのハンドルの下に嵌っている何かを弄り出した。

「はい、何かしら？」

するとそこから先程ロイドたちが出会ったレンの声がした。

「帰っているなら連絡しろって俺が言えた立場じゃないな」

「その通りよ、分かっているじゃない。
それよりも早く帰ってきてもらえないかしら？
もう3日も待っているのだけれど……」

「ちっ、もういい、すぐ行く」

「早くしてね。
そうそう、近くにいる支援課のお兄さんたちにお礼を言っておいて」

それを告げるとレンの声はしなくなった。

「だ、そうだ」

「えっと、今のは……？」

「通信機を使った通話だが？」

「いえ、そういう意味じゃなくて……」

「なぁなぁ、それよりもよ。
兄さんが乗っているそれを教えてくれよ」

「そうですね、私も気になります。
こんなの見たことがありません」

ランディとティオは目を輝かせていた。

「オーバーサイクルだ。
また後で工房に来るといい。
その時に詳しく解説してやろう。
今は五月蝿い娘が待っているのでね」

「あのませた嬢ちゃんか」

「分かりました、明日にでも早速寄らさせていただきます」

ランディ、ティオだけでなくロイドたちも目の前のモノに興味津々だったが、今は事件を追っていることを忘れてはいなかった。
事件を優先させるために彼らは再びマインツへと向かい始めた。

「支援課……特務支援課か……
Bが興味を持った1つか。
一人、いや二人か。
赤毛ともう一人、血の臭いがするな。
ロイド・バニングス、リベールの時の奴に比べると分かり難いな。
まぁ、アレは馬鹿みたいに分り易すぎただけか」

彼らの後ろ姿を見ながらアルクェイドは苦笑した。
再び、エンジンをかけるとオーバーサイクルは階段を物ともせずに登り始めた。

機械仕掛けの銀細工（後書き）

魔導二輪車と魔導動物ですが、これはエニグマの動力を内包している設定です

魔導動物の動力はクオーツで言う機功の効果を内包してあるものが使われており、半永久的に使えるようにしてあります

機械仕掛けのお人形（前書き）

自分でも驚くほどの執筆速度

その分脱字誤字が多いかもしれませんが見つけ次第随時直していきます

機械仕掛けのお人形

「いやあ～、あのオーバーサイクルって奴は格好良かったなぁ～」
ロイドたちはアルクェイドと分かれた後も彼が乗っていたオーバーサイクルに花を咲かせていた。

「それにしてもアレは何処で作られたのでしょうか？
エンジンの小型化はまだ何処も成功していないはずです」

「あの工房なんじゃないのか？
あそこの関係者みたいだし」

「案外そうかもしれないわね。
あの工房は何を作っているのか、良く分かってないみたいだし……
もしかしたら、あのアルゲントゥム製品もあそこで作られているのかもしれないわね」

「アルゲントゥムってあのオーバーペットのか。
でもあれはＩＢＣが作っているんじゃないのか？」

「いえ、確かにＩＢＣが売り出してはいますが、私はアレがあのビルで作られているのを見たことがありません」

―それにあの人、何処かで見たことがあるような……

ロイドたちが会話している間に途中にあるトンネルを抜けた時だった。
狼の遠吠えが辺りに響き渡った。

「ッッ！？」

「近いぞ！」

「彼処です」

ティオが崖上を指差す。
その先には蒼と白の毛並みを持つ狼がいた。
その狼はロイドたちを値踏みする目で見詰めていた。

「ウォン……ウーウルル」

敵対心もなく暫く唸るように吠えると崖の上へと跳び登っていった。

「え、えっと……」

「彼が言うには『最後の欠片はこの先に後はお前たち次第だ』そうです」

「言葉が分かるのか、ティオ助？」

「ニュアンスだけですが……」

「私たちが知らない何かがあるということね」

「そのようだ、みんなあと少しだ、行くぞ！」

「「「おう」」」

階段を物ともせずにオーバーサイクルで登り切ると自動で開いた門と工房の扉を確認すると乗ったまま入っていった。
そのまま室内を走り、ある部屋に入り、止めた。

「お帰りなさい、マキナ」

「そっちで呼ぶんじゃない」

その部屋の片隅にある端末でレンがかなりの速さでキーボードを叩いていた。
その反対側には異常な大きさの機械で出来た人形があった。

「で、何しに帰って来たんだ？」

「お爺さんにパテル＝マテルをメンテして欲しかったのよ。
あなたが代わりにしてくれないかしら？」

「一応、俺の分野外なんだがな……
マイスターは何処に出掛けてるんだ？」

「知らないわ。
というよりもそこは養子であるあなたの方が詳しいはずじゃない」

「養子と言われてもな」
レンと会話しながらもアルクェイドは近くにぶら下がっている工具一式が入っているベルトバッグを掴むとパテル＝マテルが固定している鉄鋼を登る。
「久しぶりだな、パテル＝マテル」
アルクェイドが巨大人形に話しかけると目の部分が点滅し、音声暗号が鳴る。
パテル＝マテルの装甲や関節などの隙間を確かめ、動力源や配線を確認する。
最後に噴射口を覗いた時にアルクェイドはレンに向き直った。
「お前、一体コイツに何させたよ。
問題は色々あるが、特に噴射口だ。
どれくらい長距離移動させた？」
「別に、ただ半年くらい飛び回ってただけよ」
半年と聞いてアルクェイドは頬を引き攣らせた。
「無茶させすぎだ、ド阿呆！」
アルクェイドが怒鳴ってもレンは素知らぬ顔で端末で何処かにアクセスし続けている。
「たくっ、せっかくパテル＝マテル用に作っていた物があるがこれじゃ渡せないな」

「あら、パテル＝マテルの為って何を作ったのかしら？」
「まだ途中だ。
それにもう少し丁寧に扱わないと渡せないからな」
パテル＝マテルの噴射口に工具を突っ込みながらアルクェイドは言う。
渡せないという言葉にレンは可愛く頬を膨らませる。
「もう、いけずね」
「なんとでも言え」
言い争いをしているように見えなくもない二人にパテル＝マテルが幾分先ほどよりもトーンが低い音声を鳴らす。
「大丈夫よ、別に喧嘩しているわけじゃないわ」
レンの言葉に答えるようにパテル＝マテルも音声を鳴らす。
「パテル＝マテルはレンに甘すぎだ。
ちゃんと叱ることも覚えろよ」
「私はそこまで子供じゃないわ。
もう立派なレディよ」
端末に向かっていたレンはアルクェイドの方に向くと後髪を掻き上げて髪を風で靡かされているように見せる。

「はん、もう少し体に凹凸が出来てから言うんだな」
アルクェイドはそんなレンを横目でちらっと見ながら鼻で笑う。
「あら、そんな脂肪が合っても邪魔になるだけじゃない。
そんなモノよりも若さが一番じゃない」
そう言ってレンはいつの間にかアルクェイドの背後に移動していて、耳に囁いた。
「はいはい、そう言うことするのは嫌いなんだろ。
それはあのエステルとか言う、うざい女にしてやるんだな」
アルクェイドは立ち上がってレンの首根っこを掴み上げ、そう言うと先程までレンが座っていた端末前の椅子の方に投げる。
投げられたレンはまるで猫の様に空中で二三回回転すると足からちゃんと着地した。
「もう、レディの扱いがなってないわよ。
相変わらず乙女心に鈍いのね」
「あーはいはい、鈍くて結構。
俺は物作ってたらそれで十分だ」
アルクェイドは噴射口のメンテが終わったのか近くにある色々なものが乱雑に置かれている机に歩み寄った。
その机の上からエニグマに似た物体を掴むとパテル＝マテルに登りだした。
パテル＝マテルの顔近くまで来ると、首の横にあるハッチを開けてそれと配線を幾つか繋ぎだした。

繋ぎ終わるとそれごと戻してハッチを閉めた。

「レン、お前のエニグマを貸してくれ」

「エニグマって新しい方？
それとも古いほうかしら？」

「ペットの方だ」

レンのエニグマは普通に警察や遊撃士に配布されている通信やアーツ用のエニグマだけでなく、アルクェイドがそれに加えてオーバーペットの機能を加えたエニグマ＝Ｍを持っているのだ。
アルクェイドはパテル＝マテルの肩から飛び降りてレンが取り出したエニグマ＝Ｍを掴むと、オーバーサイクルに引っ掛けられている最初に彼が持っていたバッグに手を突っ込む。
そこから携帯用端末を取り出すとエニグマ＝Ｍと繋ぐ。

「何を入れるのかしら？」

気になったレンはモニターを覗くとパテル＝マテルのパラメータが表示されていた。
アルクェイドがソフトを起動させるとすぐさまパーセンテージバーが現れて物の数十秒で１００％と表示された。
アルクェイドはエニグマ＝Ｍを外すとレンに手渡した。

「通信機能の所を開けてみな」

「これは……」

言われた通りに通信機能を起動すると選択肢が現れて、そこにＰ＝

Mと表記された物があった。
今まで見たことがない物を選択してみるとモニターにパテル＝マテルの顔が現れた。
パテル＝マテルが音声を発するとモニターに文字が現れた。
「電波が届いているところならそいつがあれば何処でもパテル＝マテルと会話できるようになる」
「すごいわ、これでいつでもパテル＝マテルとお話できるわ」
「後、その状態で少しばかり消耗が激しいがチェス、トランプなどのミニゲームも出来るようにしておいた」
「ありがとう！
アル、大好きよ！」
「うおっ！？」
レンは笑顔で横に立っていたアルクェイドに飛びついた。
いきなりのことに驚いてレンが飛びついてきた衝撃で少し蹌踉(よろ)けた
「ほらほら、気軽に男に飛びついたりしない」
アルクェイドは首に回された腕を掴んでレンを抱き抱えると、腕を外してゆっくりと下ろした。
「ところでお前はネットで何してんだ？」
「クロスベルで面白い子を見つけたのよ」

他にも色々と面白いことになっているみたいよとレンは言う。

「それよりもどうして急に戻って来ることにしたの？」

「ああ、Ｂから手紙が来たからな。
読んでみたら、クロスベルでリベールの時の様に面白いモノを見つけたとさ」

「相変わらずブルブランとは仲がいいのね。
それで彼が来るなら分かるけど、なんでアルが来たの？」

「私が我が姫君を見つけたように、親友である君の姫君が見つかると思うよって書いてやがったんだよ」

アルクェイドは親友の気障な言い回しに肩を竦ませながら言った。

機械仕掛けのお人形（後書き）

次回で漸く手紙が出せます
長い序章です

Bからの手紙（前書き）

これでようやく序章が終わりです

Bからの手紙

―助けて―

空高く、空気を切り裂くような速度で鷹が飛行している。
口に紙切れを咥えたまま幾つもの山を超えて飛び続けている。
鷹は帝国内の山の山頂付近に存在している小屋を目指して降下し始めた。
辺りは既に暗くなっており、本来鳥目でまともに飛ぶことが出来ない筈の夜をその鷹は飛んでいる。
小屋が見えるところまで来ると鷹は一鳴きしてから上部にある円形の切り抜かれた空間から室内へと飛び込んだ。

「ファルケか。
誰からだ？」

鷹の鳴き声が聞こえたアルクェイドは先程まで磨いていた銀片翼のペンダントを置くと鷹の止まり木へと歩いた。
そこにファルケと呼ばれた鷹が止まるとすぐに咥えた手紙を取った。
そこには『親愛なるAへ』と書かれていた。

「Bからか。
定例会は終わったばかりなのに何の用事だ？」

アルクェイドとB、ブルブランは互いの芸術の価値観を語り合う会合を年一回のペースで開いている。
アルクェイドは作った銀細工の、ブルブランは人の気高さや崇高さを語り合う。
それは互いの思考や創作などを高めるために大いに役立っていた。

アルクェイドは止まり木の近くにある箱に手を入れて、一匹のネズミを掴むとファルケに投げた。
ファルケはネズミを咥えて飛び立って行った。
ファルケは与えられたネズミをそのまま食べるのではなくて、山に放ち一定の距離を保ちながらネズミと追いかけっこをするのだ。
普通の鷹の能力を軽く凌駕するファルケからネズミは逃げられはしないのだが、それを理解しているファルケは遊んでいるのだ。
精神的にネズミを追い詰めるために朝まで追いかけるのだ。
逃さずに、捉えずに、追い詰めていく。
そうやってネズミを疲労困憊にして動けないところを躙り寄って食すのだ。

「一体その趣向は誰に似たのやら……」

アルクェイドは相棒のその趣向に肩を竦ませながら呟く。
先程まで磨いていた歪な形をした銀片翼のペンダントを掴むと手紙に封をしてある身喰らう蛇の紋章に翳(かざ)す。
翳した瞬間に紋章が淡く光り、独りでに封が開いた。
その中にある紙を取り、開いて読み始めた。

「親愛なるAへ、如何お過ごしだろうか。
こないだの……」

親愛なるAへ、如何お過ごしだろうか。
こないだの定例会は実に有意義であったよ。
あの時は愛しの姫君を見付けたばかりだったので、少々熱く語ってしまった。
そのせいか、私ばかり語っていてしまったようだ。
それで気づいたのだが、親友である君はまだ愛しの姫君を見つけ

てはいなかったはずだね？
いやいや、別にそれを貶しているわけではないよ。
それは出会う時に出会うと言うものだ。
正しく運命という他ないのだ。
君にはまだその時が来ていないというだけに過ぎないのだよ。
そこで私が今回筆を取ったのは、君に伝えたい事があったのだよ。
クロスベルと言う都市を知ってはいるかな？
そう、君が所有している劇場があるところだ。
その都市でつい先日、警察に特務支援課と言うまるでギルドのようなことをする物が出来たのだよ。
最初はただの警察の庶民への人気取りかと思ったのだがね。
なかなか、あの都市では面白いと思ったのだよ。
政治家や犯罪者、そして他の国の思惑……
そういった遊撃士だけでは到底入り込めない場所に入り込めるというのは大きな強みといえるだろう。
まだ本人達には理解はできていないみたいだがね。
遊撃士とは違った面白さが味わえると思うよ。
そしてもう一つ、君に伝えたい事がある。
むしろこちらが本題だ。
その君の所有している劇場に興味深い新人が入ったのだよ。
とても血の臭いがする新人がね……
彼女は未だ一本の線が弱々しく感じるが、成長したらどうなるだろうか？
彼女からは大きな悩みを感じる。
どうだろうか、その彼女を見てみたくはないかな？
私が思うに彼女は君にとても合うと思うのだよ。
気紛れだとしても構わない。
一目見に行ってはどうだろうか？

「アルカンシェルに新人ね……
別にどうだっていいんだけどな……」

そのままアルクェイドは手紙を今までの分を纏めている机に置こうとした。

―助けて―

「……ッッ！？」

何か痛みを感じたのか、アルクェイドは軽く頭(かぶり)を振った。
そして、手元の手紙に目を落としてから、本来両翼であった銀翼は斜めに欠けており、片翼となっているペンダントに目をやった。

「そうだな、気紛れに懐かしの我が家へと帰ってみるか。
マイスターの顔でも見に行ってやるか」

そう言って手紙を机に放り投げて、壁に掛けてある黒生地に深紅の歯車の刺繍がしてあるコートを手に取り、それの懐に銀片翼のペンダントを入れる。
製作途中の品をベルトバッグに入れて腰に付ける。

「おっと、Bに返事を出しておかないとな」

軽く手紙の返事を書いてから止まり木に貼りつけておく。
これで朝になったらファルケが帰ってきたら、すぐにブルブランに持って行ってくれるのだ。
最後にエニグマを掴んでから小屋を出た。

「さて、数年ぶりに帰るとするか」

オーバーサイクルに跨り、ハンドルの下にある窪みにエニグマを嵌める。
動力が埋めこまれたことで起動し始める。
アルクェイドは一気に加速して山を駆け降りていった。

ブルブランから来た手紙の最後には、後数文書かれていた。

私が我が姫君を見つけたように、親友である君の姫君が見つかると思うよ。
君にも私の芸術を真に理解できる日を願っている。
そして、今度あった時は君の大事な銀片翼が、何故歪に欠けているのか教えてもらいたい。

君の親友、Bより

と締め括られていた。

Bからの手紙（後書き）

オーバーサイクルの見た目なのですが、ブラック★ロックシューターのゲームに出てくる奴にそっくりとしています

期待の新人（前書き）

なんかやたらとレンがえっちぃ娘になっちゃってる……
少し自重したほうが良いだろうか？
ませた子供ってなかなか難しいです

期待の新人

「それでクロスベルに帰ってきたわけね」

アルクェイドが数年ぶりにクロスベルに帰る原因となった手紙の話をレンは黙って聞いていた。
けれど、そこがレンは気になった。

「でも、変な話ね。
アルはブルブランに言われた程度で、帰って来るようなタイプじゃないでしょ」

「だから、言っただろう。
気紛れだと」

だからこそレンはおかしいと思った。
彼は物を作っているときに素材を買うことや作品を売りに出すことすら基本的に代理人を使うくらい、外に出ることを面倒くさがるのだ。
ましてや、一番大事な銀片翼のペンダントを磨いている最中に出掛けるなどこれまでしたことがない。
まるで、誰かにそうなるように仕組まれたとしか……

「それで、ブルブランの言っている新人には会いには行かないの？」

「アルカンシェルにか……
だが、もうすでに夕方だしな」

「明日はあの支援課のおにいさんたちが来るんでしょ？

だったら、今から行きましょうよ」
「行きましょうってお前も来る気か」
「当然じゃない、ほら行きましょう」
レンはアルクェイドの手を掴むとオーバーサイクルの方に引っ張る。
「ウォークスなら暗くなる前に行けるわ」
「仕方ないな、暴れるなよ」
アルクェイドはレンに引かれるままにウォークスと呼ばれたオーバーサイクルに近づく。
ウォークスに跨るとレンは彼の背後に乗り、腰に手を回した。
「前じゃなくていいのか？」
「別にどっちでもいいじゃない。
それに、こっちのほうがアルは嬉しいんじゃない？」
わざと胸を反らしてアルクェイドの体に密着しながらレンは言う。
その行動に溜息をつきながらアルクェイドはハンドルを握る。
もう何を言っても無駄だと諦めたのだ。
「それじゃ、パテル＝マテルは留守番を頼むぞ」
「良い子にしててね」
「良い子にするのはお前だろ」

アルクェイドとレンの言葉に応じてパテル＝マテルは音声を発した。
それを聞き遂げるとアルクェイドはウォークスを発進させた。
クロスベルへの道中の魔獣は、ウォークスの排気音や振動を感じると逃げ出すのがほとんどだが、偶に恐怖からの行動で襲いかかってくるものもいる。
それらに対してはウォークスに嵌められているエニグマがオートで威力の弱いアーツを起動させる。
それは土属性の防壁を模したものだった。
それによって一瞬弾かれて魔獣はウォークスに近づく前に過ぎ去ってしまう。

クロスベルの歓楽街の目玉と成っている劇場、アルカンシェル前にアルクェイドとレンは到着した。

「相変わらずキラキラと派手ね」

「こういう物は目立つ方が都合が良いからな。
わざと悪趣味な金色にしているんだ」

スタッとレンはアルクェイドの後ろから跳び降りて、真正面からアルカンシェルを見上げる。
アルクェイドはその間にアルカンシェルのスターである、イリア・プラティエの描かれた看板の横にウォークスを止めた。

「いつも思うのだけど……

いちいちそれに興味持たれて相手するのが面倒なら、そんな目立つとこに置かないほうがいいんじゃない？」

「別に隠さないといけないような事はしてないからな」

歓楽街は夕方でもそれなりに人が多いため、すでに物珍しさからちらちらと遠巻きからウォークスを見ている者が少なくない。

しかし、持ち主がいるからか、あからさまに近寄って来る者はいない。

アルクェイドがアルカンシェルの入り口に向かって歩き出すとレンはその横に連れ添って歩いた。

アルカンシェルの舞台には数人が舞い踊り、舞台裏にはそれに合わせて機械を移動させる。

控え室の方には小道具の修理や調整、服の解（ほつ）れた所を縫い直したりしている。

全員が一体となって劇を製作しているのだ。

暫く予定の物語の練習をしていると休憩に入り、各々が水を飲んだり、座ったり、雑談を始めた。

「リーシャもなかなか様になってきたじゃない」

「本当ですか？」

この劇団のスターであるイリアが先程まで一緒に舞っていた相方に

声を掛ける。
つい先日、入ったばかりの新人であるリーシャはイリアにそう言われて嬉しそうに笑う。

「ええ、入ったばかりなのに凄いじゃない」

「本当だよ。
イリアが連れてきた時には少し不安だったけど、これなら問題なさそうだ」

「当然じゃない、この私が直々に連れてきたんだから」

傲慢とも取れるイリアの発言だったが、それを不快に感じる者はいない。
それは彼女の自信の表れであるし、彼女からそう言われることはむしろ光栄なことなのだ。

「そう言えばリーシャは入ったばかりだからオーナーに会ったことはないわね」

「と言うか、半分くらいは顔も知らないんじゃないか？」

「え？
あなたがオーナーじゃ無いんですか？」

「私は代理人に過ぎないよ」

いつも事務的なことをしている老紳士がオーナーだと思っているものが多いだろう。
リーシャもその一人で、オーナーが別にいると初めて知った。

「まぁ、もう何年も顔すら出してないからね。
ミラだけはいつも決まった日に送られて来るんだけどね」
「私でさえも数回しか会ったことがないわよ」
「イリアさんでもそんなに少ないんですか……
どんな人なんですか？」
「知らないわよ。
私たちの中じゃ、他国のお偉いさんってのが一番濃厚だけどね」
「何処の誰で、何してるかも誰も知らないのよ。
格好はいつも決まってるんだけどね」
「そうそう、いつも黒色のコートに深紅の歯車が描かれたのを着て来るんだ」
オーナーだと思っていた老紳士が格好を言うと、リーシャが入り口の方を見ながら言った。
「入り口のあの蒼い髪の人ですか？」
「そうそう、空のように蒼い髪を……している……ね」
言っていない髪の色を言われて、入り口の方を向くと話題の人物がそこに立っていた。
その姿を見たとき、老紳士は絶句した。
「オーナー！？」

その人物が誰であるのか理解すると、慌ててアルクェイドに駆け寄った。
アルクェイドは劇場の中を見渡しながらイリアたちの方に向かって歩いている。
初めて中に入ったレンは興味深そうにキョロキョロしている。

「オーナー、事前に連絡を下さったらお迎えにあがりましたのに」

「皆の練習を邪魔するわけにはいかないだろう。
それにそんなモノは必要ない」

「いえいえ、オーナーにそんな失礼なことは出来ませんよ」

「敬語も要らんと言うのに……」

言っても態度の変わらない老紳士に気付かれないように、アルクェイドは溜息をついた。

「お久しぶりね、アルクェイド」

「そうだな、イリア・プラティエ」

「なんでわざわざフルネームで言うのよ」

老紳士と違い、イリアは気軽にアルクェイドに声を掛ける。

「ねぇ、アル。
少し中を見てきてもいいかしら？」

「皆の邪魔をしないようにな」

「もう、分かってるわよ」

レンは少し頬を膨らませながらも、楽しそうな足取りで楽屋裏の方に歩いて行った。

「それで、本日は如何な御用で？」

「いや、特に用はないが……悪かったか？」

「いえいえ、オーナーならいつでも大歓迎です」

「そうよ、別にそういう事を気にしなくていいわよ」

あくまでも老紳士は丁寧な物腰で、イリアは友人の様に相手することにリーシャは戸惑っていて、碌に挨拶することが出来ない。

「君が新人か」

「は、はい。
リーシャ・マオといいます」

「あら、何処から聞いてきたの？
新人が入ったなんてよく分かったわね」

新人だと言い当てたアルクェイドにイリアは指摘する。
誰も連絡先を知らないから、何時誰が入ったかなどアルクェイドは知らないはずなのだ。

「一応所有者として知ってはおかないといけないだろう」
「私が入ったときはいちいち来なかったくせに。
ダメよ、リーシャは私のものなんだから」
「イリアさん！？」
「別にどうでもいい」
突然のイリアの発言にリーシャは声をあげる。
しかし、アルクェイドは心底どうでも良さそうに呟いた。
「うわっ、失礼な人ね。
相変わらず乙女心が分かってないわね。
そこは対抗心を見せておくものよ」
「よく言われるよ」
「だったら治そうとしなさいよ」
イリアの言葉にアルクェイドは気が向いたらなと返事した。
その言葉にイリアは呆れてしまった。
「それじゃ、俺はアイツを迎えに行ってくるよ」
「ええ、分かったわ」
アルクェイドはそれで会話を打ち切り、楽屋裏の方に歩き出した。
「そうだ、今度はどれくらい居るの？」

「さぁな、数カ月はいる予定だ」

「あら、かなり長いのね。
だったら、今度私の家に寄ってらっしゃい。
良いお酒を用意しておくわ」

「楽しみにしておくよ」

アルクェイドは背を向けたまま軽く手を振って楽屋裏へと消えて行った。

―あの人、全く隙がなかった

リーシャは暫く消えたアルクェイドの背中を眺めていた。

「どうしたの、リーシャ？
あら、彼が気に入ったのかしら？」

「そ、そんなのじゃありませんよ」

意地の悪い笑顔を浮かべたイリアの言葉にリーシャは慌てて否定する。
そう言いながらも、彼女の意識は彼の消えた場所に向いたままだった。

期待の新人（後書き）

ウォークスはラテン語で咆哮と言う意味です
基本的にアルケェイドに関することはラテン語にしています
アルゲントゥムは銀と言う意味です
ファルケは鷹です
まんまですね……はい

傍観者達の思惑

レンを探してアルクェイドは楽屋裏を歩く。
舞台から裏へと回り、途中舞台から少しだけだが、天井から吊ってある機械を見る。
マイスターが調整などはしてくれてはいるが、作ったのはアルクェイドだから細かい調整は出来ないのだ。
アルクェイドは非常に凝った物を作るのだ。
シャンデリアのパーツから吊っている鎖の一つ一つがアルクェイドが作成したものだ。
故に他に変えが利かない代物なのだ。
吊っているシャンデリアの昇降機も軽くだけだが、配線に不備や引っ掛かる感覚はないか聞いた後で楽屋の方へ行く。
すると、一室からレンと数人の女性の声が聞こえてきた。

「レン、そろそろ帰るぞ」

アルクェイドはそう言いながらドアを開けて入った。

「あら、もう帰るの？」

室内には数人の女性に囲まれたレンが、先ほどとは違うドレスを着てくるくると回っていた。

「えー、もう帰っちゃうの？」

「もっといましょうよ」

数人の女性が不満の声を漏らしながら目でアルクェイドを睨んでく

る。
アルクェイドがオーナーだと知っている女性は一人だけいるが、他の娘達とアルクェイドを交互に見ながらハラハラしている。

「ごめんなさいね。
もう帰らないと」

レンはアルクェイドが見ているのにも関わらずに、脱ぎ始めた。
アルクェイドはレンの肩が見え始めた辺りで外に出ようと背を向けた。

「外で待っている」

それだけ言うとレンの素肌を一部だけだが見たが、気にした素振りを見せずに一言だけ言ってドアを閉めた。

「もう、少しくらい焦ってくれてもいいじゃない」

アルクェイドの変わらない態度に、レンは不満気に頬を膨らませた。
その姿に回りにいた女性たちは可愛いと言いながらレンに抱きついた。

アルクェイドとレンがアルカンシェルから出てきた頃にはもうすでに太陽は沈んで夜になっていた。
アルカンシェルは下からライトアップされ、夜でも一層目立っていた。

「なかなか楽しかったようだな」
いつもよりも若干楽しそうな足取りをしているレンを見てアルクェイドはそう言った。
「そうね、結構楽しかったわ」
アルクェイドの言葉に答えながら来たときと同じようにウォークスに跨るアルクェイドの背後に乗った。
「今から行けば支援課のおにいさんたちの大物取りが見られるかしら？」
「全力で向かってやるよ。
ギリギリ間に合うだろ」
夜中まで時間があるからなとアルクェイドは答えて、マインツ方向にウォークスを向ける。
ギュルギュルと地面を擦りながら旋回して、マインツ山道へ一気に加速する。
暗い夜道をウォークスのライトだけで前を確かめて疾走する。
途中にいる魔獣が逃げる間もなく、ウォークスの前に展開された槍型の防壁に無理矢理弾き飛ばされていく。
異常な速度だというのに、レンはそれを楽しんでいるかのように髪を靡かせながら気持よさそうに目を細めている。
マインツの手前にある門が閉められた旧坑道の前まで来ると人に見つからないように物陰にウォークスを止めた。
アルクェイドはレンを抱えるとさらにその上へと跳び上がって行った。

見晴らしが良く、マインツが見える場所に行くとそこには先客が居た。

「これはこれは、今宵は殲滅天使だけが来るものかと思っていたのだがな」

先客の男はアルクェイドを警戒してか、剣の柄に手を掛けていた。

「何もしねえから落ち着いてくれ。
あんたも殺(や)りに来たわけじゃないだろ」

男の横に立つと、抱えていたレンを下ろした。
アルクェイドは男に気にせずにその横に片膝を立てて座った。
物見遊山でもせんと言わんばかりに立てた膝の上に肘をついて手の甲に顎を乗せる。
すると、レンが当然と言わんばかりに自然とアルクェイドの横にしている片膝に座る。

「噂に名高い風の剣聖、アリオス・マクレインに出会えるとはな」

「名を知られているのは光栄だが……」

アリオスは語尾をやや強めると剣の柄を握った手に少しだけ力を込めた。

「この地に災いを持ち込むというならば、容赦はせぬぞ」

「心配しなくとも私たちは何もしないわ」

アリオスの挑発と宣告にレンは笑って答える。

それは言葉通り何もしないから笑っていられるのか、それとも容赦されなくても余裕で対処出来るから笑っているのか……
レンが笑っていると宿からロイドたちが出てきて犬型の魔獣とマフィアを取り押さえた。

「どうやら終わったようだな」

「そのようだ。
しかし、まだまだ未熟だ」

「最初はそんなモノじゃないかしら」

「Bが興味を持つのも頷けるかもな」

「アルも興味を持ったの？」

少しだけなとアルクェイドは答えると頬を少しだけ緩めた。
そして、とても小さな押し殺したようなクククという笑い声がレンには聞こえた。
暫く眺めていると崖下の山道に警備隊の装甲車が数台やって来た。

「これでクロスベル郊外を騒がせていた魔獣事件も片付いたな」

「あのワンちゃんたちはあまり可愛くないわね」

「戦闘魔獣に愛嬌はいらんだろ」

「そうかしら。
あったほうが和むじゃない」

「相手を和ましてどうする」
レンとアルクェイドが会話しているとアリオスは興味は失せたのか、背を向けて歩き出した。
「あら、もう帰るのかしら？」
「ああ……
そういえばそちらの御仁の名を聞いていなかったな」
数歩歩いた所でアリオスはアルクェイドへ向き直った。
「……レギス」
「承知した」
名を聞いたアリオスは再び歩き出そうとしたが、アルクェイドな呼び止められた。
「俺も聞きたいことが有るんだがいいか？」
「内容による」
「あんたが頻繁に病院に通っているのは嫁でも入院しているのか？」
「私が通っているのは知っているのにその先は知らぬのか」
「俺は最低限のプライバシーは踏み込まない様にしてんだよ」
本当に知らないのか、それとも言質を取って確認したのか分からな

いが、アルクェイドの真意を探るようにアリオスはアルクェイドを見詰める。

「……娘だ。
目が見えなくて入院させている」

「そうか、なら明日……」

「明日は支援課のお兄さん達が来るでしょう」

「だったな、明後日ローゼンベルグ工房に来てくれ」

「素直に行くと思っているのか？」

「無駄足にはさせんよ」

「……気が向いたらな」

そう言って、アリオスは崖下へ降りていった。

「2人とも素直じゃないのね」

アリオスとアルクェイドの会話が面白かったのか、レンはくすくすと笑う。

「支援課はどうやら今夜はマインツで過ごすようだな」

「夜も遅いからね、私も眠くなってきたわ」

「それじゃ、俺らも帰るとするか」

欠伸を噛んだレンを来たときと同じように抱えて、アルクェイドは崖下へ飛び降りた。
彼ら三人がいた場所、そことは違う場所で支援課の行動を見ていた者がいた。
その蒼と白の毛並みを持つ狼は三人の行動も気にしていた。
特に支援課がマフィアを抑えた後は隠す気すらなく、彼らを見ていた。
無論三人はそれに気づいていたが、特に気にしてはいなかった。
崖下へと降りたアルクェイドはレンを抱えたまま、ウォークスに乗った。
発進する時に少しだけその狼がいた場所に視線を送ったが、すぐさま視線を戻して山道を駆け降りた。
睡たげなレンを気遣ってか、幾分速度を抑えて出来るだけ振動や排気音が鳴らないように走行した。

かって何処かで（前書き）

何か良いサブタイ考えてたらいつの間にか寝てました
そのまま特に思いつかずに微妙なのになってしまいました

ヒロインって誰がいいんでしょうか？
なしならなしでいいんですけど、候補はティオ、リーシャ後レンの
誰かで考えてるんですが誰がいいでしょうか？
一応三人とも設定は考えてます

かって何処かで

「目…か。
目が駄目なら耳で出来ることか……」
深夜の工房でアルクェイドは端末を弄(いじく)る。
「噂通りならアリオスとほとんど会話すらできてないだろうな。
データデバイスはエニグマで十分か。
後は集音と録音、声のトーンか。
……それと1つだけサプライズだな」
アルクェイドは実に楽しそうに口元を歪ませている。
「これで十分か」
背もたれに持たれながら端末に接続されたエニグマを取り外す。
「……ん?
珍しいな、レンが足跡を残したままにするとは」
画面内には昼間にレンが弄っていた時のままの物が幾つか残っていた。
「いや、敢えて残しているのか。
面白い子……か。
他には何を見ていた?」
アルクェイドは敢えてレンが目を付けていた面白い子を見ずに他の

を見始めた。

「ルバーチェ、黒月（ヘイユエ）、何故マフィア……
黒の競売場（シュヴァルツ・オークション）？
なんでレンがこれを……なにッッ！？」

レンが残していたままのマフィア関連の情報。
その中での裏社会のオークションの一つである、シュヴァルツ・オークション。
その出品予定のリストの中に二つばかり気になったのが入っていた。

「糞が……
まだ俺はそこに出した覚えはないぞ。
一体何処から持ってきやがった……」

端末の置かれた机を壊さんとばかりに力を込めて叩く。

「ルバーチェ会長マルコーニ……」

アルクェイドは冷たい目でモニターに表示されたルバーチェ会長を睨んでいた。

翌朝、マインツの宿場から出てきたロイドたちは警備隊に捕らえた

マフィアを受け渡していた。
しかし、クロスベルのある議員とルバーチェが繋がっていて、ミラを出せば彼らはすぐに釈放されるということを聞くと肩を落とした。
「確かに無駄なことかと思えるかもしれないけど、決して無駄ではないからこれからも頑張ってね。
ノエル、彼らをクロスベル市まで送ってあげて頂戴」
「イエス・マム！」
上司であるソーニャ副司令に言われてノエルはすぐさま敬礼して答える。
彼女はそのままノエルが支援課を送るための一台の車を残して、マフィアを連れて先に山を降りていった。
「それでは皆様、私が責任を持って送り届けさせて頂きます！」
ノエルがそう張り切ってロイドたちに言うと皆微妙な顔をして見合わせた。
「どうされました？」
「いや、なぁ……」
「ああ、ちょっとな」
怪訝な顔をしたロイドたちにノエルは聞いたが要領を得ない答えしか返って来なかった。
「実は今日はこの後、ローゼンベルグ工房に行く予定なのです」

「ローゼンベルグ工房ですか？」

「ええ、だから途中の分かれ道まで送ってもらえないかしら？」

「はい、分かりました！」

エリィの言葉にノエルは敬礼で答えると、五人は車へと乗り込んだ。ノエルは全員が乗ったのを確認したら車を発進させた。

「皆さんはどうしてローゼンベルグへ？」

「昨日あった人に招待されたんだ」

「招待？

ローゼンベルグ工房へ？」

「ええ、その人がとても興味深い物に乗っていたので、それを見ていたら来たら詳しく説明すると言われたので」

「へぇ～、実は私も昨日、初めて見るものに乗っていた人がいるんですよ」

「お、それはオーバーサイクルって奴か？」

「そうなんですよ、支援課の皆さんも会ったんですか？」

「ええ、今日はそれで伺うことになったの」

「誰も入ったことのないあの工房にですか。

羨ましいですね、私も行ってみたいです」

「それじゃ、ノエルちゃんも行ってみるか？」

「そうしたいのはやまやまですが、仕事がありますので……」

「ところでノエルさん。

先程から気になっているのですが、その腰の銀細工は……」

ティオは腰に付けられている銀細工が出会った時から気になっていた。

「これですか？

実はこれ、オーバーペットの一番人気タイプなんですよ」

「ええ！？」

「一個数十万ミラは下らないというレア物じゃないか！？」

「ノエルさん、一体それを何処で？」

エリィやランディがその事実に驚きの声を上げたがティオは至って冷静で聞いた。

「実はその昨日あった人に迷惑料だって二つも貰ったんです」

「二つも！？」

「それで、そのもう一つは？」

「その人の審査をした子に渡してあります。
その子の分だって言われましたので……」

「そうですか、残念です」

「ティオ助、まだあったら貰うつもりだったのか……」

ティオのその言葉に皆は苦笑した。

「でも、ティオは確か持っていなかったか？」

「はい、持ってはいますが私が欲しかったタイプではないです。
全く、所長も使えませんね。
どうせ持ってくるなら私が欲しい物を持ってきて欲しいです」

「いやいや、それでも頑張ったんだと思うよ」

ティオは持ってきてくれたロバーツ所長に対して大きく溜め息をついた。
ティオの辛辣な言葉にロイドは必死にフォローする。

「しかし、それを簡単に渡すなんて一体何者なんだ？」

「そうね、ローゼンベルグの関係者で珍しい物を幾つも持っているなんて……」

「案外それを作ってる奴だったりしてな」

「まさか」

「……」

ランディの言葉に全員が笑い出す。
言ったランディ自身も本気で言っているわけではなく、すぐにだよなぁと言いながら笑う。
その中でティオだけは何か難しい顔をして黙っていた。

「それでは皆様、自分はこれで失礼します」

「ああ、ありがとう」

ローゼンベルグ工房への分かれ道まで来たロイドたちは、装甲車から降りてノエルを見送った。

「それじゃ、向かうとするか」

「そうね」

「……」

「どうした、ティオ？」

「いえ、なんでもありません」

ロイドは先程からずっと黙っているティオに声をかけるがはぐらかされてしまった。

―銀細工に蒼い髪……やっぱり何処かで―

ロイドたちは階段を登り、工房前の門へと着いた。
庭の一角には工具を広げてウォークスを整備しているアルクェイドと、その背中に凭れるようにエニグマ＝Mを触っているレンの姿があった。
ロイドたちの姿を見ると立ち上がってドレスを少し持ち上げてお辞儀をした。

「ようこそ、ローゼンベルグ工房へ。
歓迎致しますわ、特務支援課の皆様」

レンが頭を上げると閉められていた鉄門が独りでに開いた。
ロイドたちは勝手に開いた門に戸惑いながらも、彼らの方に歩み寄った。

互いに自己紹介を終えた後、ロイドとエリィはレン、ティオとランディはアルクェイドと話していた。

「なるほど、エニグマを動力に使うことで力不足を補っているわけ

ですか」
「速度を出すとその分消耗は激しいが、セキュリティーは万全になる」
「個体識別番号でロックをかけるわけですね？」
「そうだ、後エニグマのアーツを使うことで事故を極力防ぐことも出来る」
「しかし、オートで使うには些か危険じゃないですか？」
「現状は威力を下げて相手に怪我させない様にするしかない」
「なるほど……」
何かを思案しているティオに変わって、今度はランディが話しかけた。
「なあなあ、俺も乗ってみたいんだが」
「乗るのは構わないが、乗用車の免許は持っているのか？」
「あー、持ってねーな」
「一応乗用車として登録しているから、乗らない方がいいだろう」
「今は警察だしな、皆に迷惑かけるわけにはいかないか」
「一人用だしな、レンくらいなら一緒に乗れなくはないが……」

「……だったら、私を乗せてはくれませんか？」

「構わんぞ」

「かぁ～っ、羨ましいぞティオ助」

アルクェイドはウォークスに跨がるとティオの手を引っ張って後ろに乗せた。

一手を引かれるこの感覚、やっぱり何処かで一

アルクェイドはティオを乗せてウォークスを発進させ、階段を駆け下りた。

「ア゛ア゛ア゛アアア゛ア゛、階段は無茶です！」

一段ずつ揺れの振動がかなりくるのか、ティオは悲鳴を上げていた。

「俺も免許取ろうかなぁ」

もう見えなくなった彼らを羨ましく思いながら、ランディは呟いた。

「ち、ちょっと、と止めっ止めて下さい！」

ティオの制止の要求を聞かずにアルクェイドは一気に階段を駆け下りた。

「どうした？」

分かれ道に着いてから漸くアルクェイドはウォークスを止めた。

「はぁはぁ……はぁっ……
どうもこうも、階段を降りるなんて無茶です！」

階段の振動で落とされないように、必死にしがみつくのがかなりキツかったのか、ティオは息も絶え絶えだった。

「レンはいつも平気そうにしているぞ？」

「レンちゃんが……？
後でコツを聞いておきます」

「そうしろ。
取り敢えず、マインツまで往復するか」

「分かりました」

アルクェイドはティオの返事を聞くと、ウォークスをマインツへ向けて発進した。

「これは……
普通に動かすのでもアーツが発動している？」

ティオはウォークスの周りに微かに力を感じた。

力はウォークスの先端から流れていた。
「よく気付いたな。
空気抵抗を出来るだけ少なくするためだ。
そんな小難しいことは考えずに今は乗り心地を楽しんでろ」
「……そうします」
本音を言えばまだまだ聞きたいことだらけだが、聞いても答えないだろうとティオは思った。
「少し加速するぞ」
その言葉に答えずに、ティオはアルクェイドの背中を掴む力を少しだけ強めた。
アルクェイドは服が引っ張られる感じが強くなったことを感じると加速した。
それに伴い、心地よい振動がティオにも伝わっていく。
マインツの前に来た辺りで、ティオはアルクェイドに話しかけた。
「あの、何処かであったことが無いですか？」
「俺とお前がか？」
「そうです」
「……いや、記憶にないな」
「……そうですか」

そのまま、ティオは黙ってしまった。
暫くの間走って分かれ道が見える辺りまで戻ってくると、コツンとアルクェイドの背中に何かがぶつかって重みが加わった。
それが何か瞬時に理解して、幾分速度を落としてそのまま再びマインツ方向へ向かった。

「寝始めたか……
レンもそうだったが、女ってのは器用なもんだな……」

ゆっくりと、程良く頬を撫でる風を感じながらアルクェイドは何度も往復していた。

楽園の終わり（前書き）

感想でアルクェイドの年を聞かれたので書いておきます

アルクェイドは１９歳です
ロイド、エリィが１８なんでその上ですね
生まれは共和国です
マイスターに拾われたことはそのうち本編で書きます

楽園の終わり

「悪いレーヴェ、遅れた」

「遅かったな」

「しつこいのがいてな、うざいからバラしてきた。
ガキの目の前でやっちまったけど大丈夫かね？」

「芸術家というのはそういうものじゃないのか？
その子供には同情するな」

「俺とアレを一緒にされるのは心外なのだが」

「自分の価値観に無理矢理理解させようとする輩という意味だ」

「喧嘩売ってんだろ、な？」

「そんなことより……」

「てめぇ……
まあいい、今は胸糞悪い『楽園』潰しだ」

「この世に楽園など無いことを教えてやろう」

そこには銀と蒼、黒の三人がいた。
黒は依然と口を開かず、銀は憮然と冷静に、蒼はとてつもなく苛立っていた。
黒と銀は剣を構え、蒼は袖からジャラジャラと鎖を垂らす。

蒼が鎖をドアにぶつけて力づくで吹き飛ばす。
それを合図に三人は館の中へ踏み込んだ。

―この日、楽園は消え去った―

「もっかい答えて貰おうか？
これの何処が芸術なんだ、ああ？」

「……」

「放してやれ、もう既に死んでいる」

「チッ、胸糞悪い。
アレもそうだったが、こっちもうぜえ。
生き残りはいたか？」

「一人だけな」

「こいつは……」

「この傷は恐らく自分で付けたものだろう」

「そうじゃないと耐えられなかったか。
裏の世界は何処（どこ）も彼処（かしこ）も狂ってなきゃやってられないよな」

自嘲する笑みで蒼が言うと銀は聞く。

「まだ、後悔しているのか、この世界に入ったことを」

「別にしてないよ。

マイスターにゃ感謝してるし、生か死かって言われたら生だろ、普通」

「お前はまだ子供なんだ、泣きたい時は泣けばいい」

「涙なんざ、友達（だち）に殺されかけた時に枯れたっての……
俺は覚えちゃいないがな……」

「だからアルはレンの王子様なの」

「ははっ、王子様か」

「レンはお姫様なのだから王子様なの」

「ふふ、羨ましいわね」

アルクェイドがティオを乗せて駆け下りるとき、レンはロイドとエリィに馴れ初めを語っていた。
無論大幅にぼかしてはいるのだが……

「ア゛ア゛ア゛アアア゛ア゛、階段は無茶です！」
それを微笑ましく笑っていると、悲痛な声が聞こえてきた。
「……」
「なんだ、今の？」
「さ、さぁ……？」
「もう、レン以外の人を乗せるから……」
「えっと、レンちゃん。
今のって……」
「アルがウォークスにレン以外を乗せたら皆叫ぶのよ。
すっごい乗り心地が良いのに」
アルクェイドがレン以外を乗せているからなのか、それともウォークスに乗っているのに悲鳴を上げているから不満なのか、レンは面白くなさそうな顔をしていた。
「ねぇレンちゃん。
アルゲントゥム製品ってもしかして此処で作られているの？」
「いいえ、でも作っている人なら知っているわ」
「本当なの！？」
「誰なんだ！？」

「誰ってアルよ？」

「あの人が！？」

「マジかよ……」

ティオとアルクェイドが走り去って暇になったのかランディもロイド達の方に寄って来ていた。

「だから気軽に二つも渡したのか……」

「私のこれもアルが作ってくれたのよ」

そう言ってレンは懐からエニグマ＝Ｍを取り出す。
エニグマ＝Ｍはアルクェイドが作ったものでレンしか持っていないのだ。
オーバーペットはもともとアルクェイドがパテル＝マテルのために作っていたものだ。
しかし、まだ完成はしておらず、完成のためのデータ収集のために売りだしたものだった。

「エニグマにオーバーペットが入っている……」

「ってか、これ端末みたいに画面通話も出来るぞ！？」

「何者なんだ、あの人は……」

ロイドたちが驚愕する中でレンは終始笑っていた。

夕方になってアルクェイドはティオを抱えて歩いて階段を登ってきた。
ウォークスに乗ったまま登ると振動で目を覚まされても困るし、落ちたら少々の怪我では済まないからだ。
結局、ティオが一度も目を覚ます事なく、ローゼンベルグ工房に戻ってきた。

「……ん…ぁ？」

「起きたか」

アルクェイドの背に乗せられていたティオは門が見える位置まで来るとようやく目を覚ました。

「……っ！？
も、ももう大丈夫です、下ろしてください！」

自分が何処で寝ていたか気づくとティオは慌ててアルクェイドの背から下りた。

「……不覚です」

ティオは大きく肩を落としていた。

「小さい体で特務支援課を頑張っているんだ。
疲れていて当然だろう」
「小さいは余計です」
「悪かった」
アルクェイドの言葉に少しだけ機嫌を悪くしたように見えたティオは早足で工房へ戻っていった。
しかし、ティオの口元は少しだけだが、緩んでいた。

その後、ロイドたちは彼らを別れ、クロスベル市へ戻った。
アルクェイドとレンは彼らの背中が見えなくなるまで見送っていた。
「レン、後でティオ・プラトーの経歴を調べておいてくれ」
「あら、急に女の子を調べてくれなんて……惚れたの？」
「……」
「冗談よ冗談」

「ティオ・プラトーに何処かで会ったことはないかと言われたんだ」
「ふ～ん、それは気になるわね。
引き篭もりのあなたに出会うなんてよっぽどよ」
「喧(やかま)しい」
アルクェイドは相手に出来んと言わんばかりに工房の中へ入っていった。
レンはそんな彼を気にせずに、ロイドたちを見ていた。
「ふふ、これはちょっと私たちも面白くなりそうね」
レンは嬉しそうにいつまでも笑っていた。

余計な荷物（前書き）

何故かレンとの絡みが書きやすいんですよね
そのためになぜかレンがややえっちぃ娘に……
もっとも今回は全く出てきてきませんが

余計な荷物

ロイドたちが支援課に戻るとそこにはあの蒼と銀の毛並みを持つ狼がいた。
疑惑を晴らした礼としてサポートするために住み込み、警察犬として登録された。
既にあの魔獣事件から一週間が経っていた。
特に目立った事件もなく、支援課のメンバーは比較的平和な日々を過ごしていた。

「また駄目でした」

そう言って、無表情な顔でティオは事務所に入ってきた。

「よくあれだけ断られていながら、ティオ助も毎日通えるな」

既にこの光景は珍しくなくなっていた。

「初めてそう言われて入ってきたときは何かと思ったよな」

「そうね、あからさまに肩を落として入って来たわよね」

ローゼンベルグ工房に行った次の日からティオは通い始めた。
初日の落ち込み具合は全員が驚愕した。
何があったのか聞くと頼みを断られたという。
今ではさほど落ち込んだ様子はなく、皆もまたかと言って苦笑していた。

「けど、毎日何処に行っているんだ？」

「初日はＩＢＣのビルに調べ物へ、次の日からはローゼンベルグ工房です」

「ローゼンベルグへ？
何しに行っているんだ？」

「そんなの決まってるじゃないか。
あのオーバーペットを譲って貰いにだろ」

「ランディさんは失礼です。
私がそこまで欲しがっていると思っているのですか」

「そうだぞランディ。
いくら……」

「まぁ、断られましたが……」

「って頼んだのかよ！」

「はは、ほらな」

「はぁ……
あまり迷惑かけないようにな」

「分かってます」

そう言って、ロイドはトンファーの整備に、ランディはグラビア雑誌に戻った。
エリィは自室へと階段を上っていった。

ツァイトはいつも通り屋上で日を浴びているだろう。
ティオもエリィに続いて階段を上っていった。
自室に入ったティオは机の上に置いてある紙束に目を通す。
そこにはアルクェイドについて書かれていた。
しかし、アルクェイドについて書かれていることは少なく、一枚目の半分にも満たない。
他の紙はオーバーペット等のアルゲントゥム製品とオーバーサイクルについてだった。

「ＩＢＣのネットワークでも何もないなんて……」

最初は自分の閲覧できないとこに保存されているのだと考えて、エイオンシステムを駆使してまで調べたが掠りすらしなかった。
だから、次の日からは本人に聞きに行ったが、あなたは何者ですか、なんて聞けるはずもなく、アルクェイドについて分かることは何も増えなかった。
分かっていることは名前とアルゲントゥム製品とオーバーサイクルを作ったことだけ……

「謎過ぎです、怪しすぎます……」

呟きながらティオはベットに飛び込んだ。
ギシギシとベットは軋むが気にせずティオは転がる。
そして、枕元にあるみっしぃ人形を抱き寄せた。

「私はあの人かどうか確かめたいだけなのに……」

ティオの脳裏に甦るは忌まわしい記憶。
あれから長いときが経つが未だ忘れることは出来ない。
それはロイドの兄である、ガイ・バニングスが助けに来るよりも前

のことだった。
最初は夢だと思っていた。
いや、今でもアレは夢だったんじゃないか？
辛い日々から逃避するために見た幻だったんじゃないか？
そう思う。

―確かにあの人は蒼い髪に銀色の何かを持っていた―

何度も夢じゃないと信じながら……紅く染められた光景を……
忌まわしい記憶に体力を消耗したティオは何時の間にか寝付いていた。
その頬には一筋の涙が流れていた。

「これがティオ・プラトーの経歴か。
幼少の頃に失踪、三年後にウルスラ病院に入院、その数ヶ月後に家に帰る。
しかし、馴染めずにエプスタイン財団に出奔。
そして、今回オーバルスタッフのデータ採集のため特務支援課に協力……」

レンが集めた情報を読み上げて、忌々しげに紙を机に放り投げる。

「この失踪の間の場所と内容、出奔の理由は無いのか？」

「私が調べた限り無かったわ」

アルクェイドはレンの返事に苛立たしく髪をかき揚げる。
それは知りたいことが無いからではなく、恐らくティオが他人に知られたくないことを知ってしまったからだ。
しかし、レンは嘘をついていた。
レンはちゃんとティオが何に拉致されていたのか、知っている。
不幸にも、それはレンが拉致された集団の一部が楽園だったからだ。
アルクェイドはレンの過去を聞いたことはない。
それはレンが聞かれたくないと思っていると思っていたからだ。
実際、レンはそれをアルクェイドに知られたくなかった。
一度それに繋がる情報を渡せば、すぐに知るだろう。
だからそれを渡せなかった。
アルクェイドも他からレンの過去を聞くのは良しとしないだろう。
本人が知られたくないなら尚更だ。
ティオの過去も細かいとこまで知る気はなかった。
ただ何処で会う可能性があったか知りたかっただけだ。

「迂闊だったか……」

ヤバい可能性は大いにあったのだ。
あの年で警察、しかも特務支援課という特殊な場所、そしてアルクェイドに会ったことが有るかもしれない。
これだけでティオに何かあると知るには十分だったのだ。

「自分の荷物、勝手に背負われちゃ気味が悪いよな」

アルクェイドは目の前のレンが調べたティオ・プラトーの経歴を握

りつぶした。

「少し出かけてくる」

「何処に行くの？」

「ＩＢＣ本社」

「いってらっしゃい」

珍しくウォークスに乗らずに、アルクェイドはコートを掴むと工房から出ていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5147y/

英雄伝説－刹那の軌跡－

2011年11月23日12時49分発行